師の説になづまざること　解答

A　語句の意味

(1) よくない。まずい。(劣っている) ／「悪（あ）し」ほど強くなく、「よし」に対して「よくない」くらいの意味

(2) 区別する。(よしあしを）はっきり見分ける。 ／ここは、師の説のよくない点を見分けて、はっきり言うこと

(3) 遠慮する。ためらう。 ／現代語の「人目をはばかる」と同じ。「な〜そ」とあわせて「遠慮するな」

(4) 実に。まことに。たいそう。(「世間で」と取る説明もあるので、お使いの教科書に合わせること) ／副詞の「世に」は「実に」の意味。下に打消がくると「決して〜ない」

(5) 決して〜ない。まったく〜ない。 ／「さらに」「つゆ」「よに」＋打消＝まったく〜ない。現代語の「さらに（もっと)」ではない

(6) 明らかにする。はっきりさせる。 ／★現代語の「あきらめる（断念する)」ではない。テストの定番

B　文法

(7) 存続の助動詞「り」の連体形（〜ている)。 ／「り」は四段の已然形（e段）とサ変の未然形につく（サ未四已)。ここは四段「たがふ（＝食い違う)」の已然形「たがへ」についている

(8) 打消当然・不適当（〜てはならない・〜べきでない)。ここは「あってはならない」。禁止と説明する教科書もあるので、お使いの教科書に合わせること。 ／「まじ」は「べし」の打消にあたり、終止形につく（ラ変型の語には連体形)。だから「あり」ではなく「ある」＋まじ

(9) もとの形＝多かるめれど。撥音便。「めり」＝推定（〜ようだ)。 ／「ん」が書かれず「多かめれど」となる本もある。「めり」は目で見たことからの推定。婉曲と説明する教科書もある

(10) 「られ」＝尊敬の助動詞「らる」の連用形。「し」＝過去の助動詞「き」の連体形。 ／★受身ではない。教えたのは師（賀茂真淵）で、作者が師を敬っている。「き」は自分が直接経験した過去

(11) 禁止（〜するな・〜してくれるな)。 ／「な」(副詞）＋動詞の連用形＋「そ」(終助詞)。「な」と「そ」の間に「はばかり（連用形)」が入っている

(12) 強意の係助詞。結び＝「し」(過去の助動詞「き」)、活用形＝連体形。 ／文末が終止形「き」ではなく連体形「し」になっている。「なむ」の識別は、未然形＋なむ＝願望の終助詞、連用形＋なむ＝「ぬ」の未然形＋「む」、文末を連体形で結ぶ＝係助詞

(13) 「で」＝打消の接続助詞（〜ないで)。「え〜ず」＝不可能（〜できない)。全体で「混じらないではいられない＝必ず混じる」という意味になる。 ／「で」は未然形につき、「ずして」と同じ働き。打消が二つ重なって、強い肯定になる

C　指す内容・敬意の方向

(14) 作者が古い書物を説くときに、師の説と食い違うことが多く、師の説のよくないところをはっきり見分けて言うことも多い、ということ。 ／直前の「おのれ古典を説くに〜わきまへ言ふことも多かる」までが指す内容

(15) 作者（本居宣長）から、師（賀茂真淵）への敬意。 ／地の文の敬語は作者から。教える動作をしたのは師

(16) 師の「後によい考えが出てきたら、必ずしも師の説と違うからといって遠慮するな」という教え。 ／「こ」＝これ。直前の「」の中の言葉を受けている

(17) その説を立てた人とは別の人。ほかの学者。 ／「おのが心」(＝説を立てた人自身の心）と対比されている。「ことなる」＝異なる

D　口語訳

(18) 後になってよい考えが出てきたような場合には、必ずしも師の説と違うからといって、遠慮してはならない。 ／「たらむには」の「む」は仮定・婉曲（〜ような場合には)。「とて」＝〜といって

(19) 決して一人や二人の力で、すべてを明らかにし尽くすことができるものではない。 ／「もて」＝もって（〜で)。「べく」は可能（〜できる）の「べし」。「さらに〜ず」で強い打消

(20) また、すぐれた人の説であるからといって、多くの（説の）中には、どうして誤りがないことがあろうか、いや、誤りもあるはずだ。 ／「ならんからに」＝〜であるからといって。「などか〜む」は反語。「いや、〜」まで訳す

(21) 必ずよくないところも混じらないではいられない（＝必ず混じっているものだ)。 ／「で」＝〜ないで。「え〜ず」＝〜できない

師の説になづまざること　解答／現代語訳

E　内容・記述

(22) 師自身が、いつも「後によい考えが出てきたら、師の説と違っても遠慮するな」と教えていたので、師の説の誤りを正すことは、かえって師の教えにしたがうことになるから。 ／⑦〜⑨の師の言葉が根拠になる

(23) 師が、自分の説を守らせることよりも、後の人がよりよい考えを出して学問が正しく進むことを大切にしており、弟子に自分の説を正されることまで認める、心の広い態度だから。 ／「師の説だから正しい」とは考えない、学問の真実を第一にする姿勢

(24) 古代のことは一人や二人の力ではすべて明らかにできず、すぐれた人の説にも必ず誤りがまじる。自分では完全だと思った説でも、思いがけずほかの人のよりよい考えが出てくるものだ、ということ。 ／これが、第一段の「師の説でも、よくない点は言ってよい」という考えの理由になっている

(25) 「なづむ」＝こだわる・とらわれる。師の説だからといってそれにこだわらず、誤りがあれば正して、よりよい考えを取り入れていくということ。 ／★「師を軽んじる」ことではない。師自身の教えにしたがう態度でもある

F　文学史（本文全体をふまえて答える）

(26) 本居宣長。注釈書＝『古事記伝』。 ／江戸時代の国学者。『玉勝間』は、学問や見聞についての考えを書きとめた随筆

(27) 『万葉集』。できごと＝松坂の一夜（まつさかのいちや）。 ／真淵には『万葉考』『冠辞考』などの著作がある

(28) もののあはれ。 ／儒教や仏教の教えで物語の善し悪しをはかるのではなく、しみじみと心が動くことこそ物語の本質だとした

【現代語訳（全文）】

私が古い時代の書物を説き明かすときに、師（賀茂真淵先生）の説と食い違っていることが多く、師の説のよくないところがあるのを、はっきり見分けて言うことも多いのを、まったくあってはならないことだと思う人が多いようだけれど、これこそがそのまま私の師のお考えであって、（師が）いつもお教えになったことは、「後になってよい考えが出てきたような場合には、必ずしも師の説と違うからといって、遠慮してはならない。」と、お教えになった。これはたいそう尊い教えであって、私の師が実にすぐれていらっしゃる点の一つである。

だいたい、古代のことを研究することは、決して一人や二人の力で、すべてを明らかにし尽くすことができるものではない。また、すぐれた人の説であるからといって、多くの（説の）中には、どうして誤りがないことがあろうか、いや、誤りもあるはずだ。必ずよくないところも混じらないではいられない。その（説を立てた）人自身の心では、今はもう古代の心はすべて明らかになった、この説をさしおいては（正しい説が）あるはずもない、と思い定めたことでも、思いがけず、また別の人の異なるよい考えも出てくるものである。

▸ 古文・漢文の参考書のおすすめ（楽天・Amazonのリンクつき）　kotennosennsei.com/koten-kyozai-review/　　▸ 解説記事にもどる